

忠犬と飼い主～ I F ～もしもオリ主が相棒世界のあの人の関係者  
だったら？

herz

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

忠犬と飼い主く本編↓<https://syosetu.org/novel/215543/>のオリ主がもしもテレビドラマ「相棒」のあの人の関係者だったら？という設定の話。「相棒」とのクロスオーバーです。忠犬と飼い主シリーズ本編の、組織壊滅後の話。

---

忠犬と飼い主く本編くのアンケートにて。僅かながら票が入ったので、ハーメルンでも公開します！

もしよろしければ、意見や感想を頂けると嬉しいです！

pixivでもheartの名前で同じ小説を投稿中！

↓<https://www.pixiv.net/users/13031036>

よろしく願います！

目次

I F ①	再会 前編	1
I F ①	再会 後編	15
I F ②	花の里にて 前編	29
I F ②	花の里にて 後編	42
I F ②	花の里にて おまけ	50

## I F ① 再会 前編

黒の組織壊滅作戦が終わり、後始末に追われていたある日のこと。

「和哉さん。よかったら、今日の昼食はここで食べませんか？」

そう言っつて、秀一がスマホの画面を見せてきた。……そこには、あのレストランのホームページが。

俺は、そのレストランの事知っていた。

「その店、パスタがうまいって評判の店じゃねえか。それも予約制の……」

「今日の昼に、2人席を予約してあります」

「……マジで？」

「はい」

「……よくやった！」

思わず、目の前にあった秀一の頭を撫でていた。1回食べてみたかったんだよ、この店のパスタ！

「でも、何でいきなり？」

「和哉さんが数日前に1度は食べてみたいと言っていた事を思い出して昨日電話してみたら、運良く2人席のキャンセルが出っていたので、そこに予約を入れました」

「そうだったのか」

全く、こいつは本当に良くできた弟子だな！最近の後始末の疲れが一気に吹っ飛んだ。

「そうゆう事なら、午前中のやるべき仕事はさっさと終わらせちまおう！」

「はっ」

……俄然やる気を出して仕事を捌き始めた俺を見て、秀一を含めた幹部や仲間達が安堵する様子を見せた事を、俺は知らない。

仕事を一段落させて、秀一が予約したレストランに向かった。合同捜査本部があるビルからもそこまで遠くないため、ゆつくり食べても問題ない。……むしろ、仲間達からはゆつくり食べて休憩してくる事を勧められた。

自覚はそこまでなかったが、最近の俺は働き過ぎだと思われていたらしい。だから、食事の時ぐらいはゆつくりしてきて欲しい、と心配された。

既に秀一が根回ししていたらしく、俺が知らないうちにうまく仕事を割り振る事で、俺がゆつくりできる時間を作っていたようだ。

「——俺は良くできた弟子と、優しい仲間達に恵まれているんだな……」

しみじみとそう言えば、弟子と仲間達から微笑ましいとでも言いたげな視線を向けられた。

閑話休題。……レストランに到着し、店員に案内された席に座った。窓際の席だった。

このレストランはある高層ビルの中にあり、それだけに窓際席から

は眺めの良い景色が見える。

「ここは夜になると、夜景がとても綺麗に見えるらしいです。……本当はその時間帯で予約したかったのですが、生憎とそちらは全て埋まっていました。申し訳ないです」

「いや、構わないさ。……昼でも充分、いい景色だ」

眼下では米粒のようではあるが人の往来が見え、それよりも上に視線を向ければ、ビル内で仕事をしている様子の人達も見える。……彼ら彼女らは、いつも通りの日常を送っている。

「むしろ昼にこの席を予約してくれて良かった。そのおかげで、明るいからよく見えるぜ。彼ら彼女らの平和な日常風景が……」

——黒の組織を壊滅させるために、頑張った甲斐があった。

「——俺達の手で守ったものを、この目で再確認する事ができて……安心したよ」

「——」

そう言って笑えば、秀一は目を見開き、それからすぐに真顔になった。

「和哉さん」

「何だ？」

「あなたは——聖人か何かでしょうか」

「は？」

「いつものようにポーカーフェイスを取っ払ってあなたを讚える言葉を羅列したいところですが……ここは外なので、頑張って自重します。非常に残念です」

「……………はあ？」

何言ってんだこいつは？

「お待たせいたしました——」

その時。店員が注文していた料理を届けてくれたため、とりあえず食べる事にした。

「……うまい」

パスタがうまいと評判になっている理由がよく分かった。これは本当にうまい。思わず、口元が緩む。

するとクスクスと、小さな笑い声が目の前から聞こえた。

「……何だよ、秀一」

「ふふ……いえ、失礼しました。あなたが、幸せそうに味わって食べている事が微笑ましくて、つい」

「………うまいものをうまいと言って、何が悪い。笑うんじゃない」  
「はいはい」

俺が睨むと、秀一は軽く両手を上げた。しかし、僅かに笑っている。……照れ隠しだとバレてやがる。くそ。

「お前も冷めないうちに食べる。本当にうまいぞ」  
「そうします」

それから、ゆっくり昼食を食べつつ秀一と談笑していると……

「………やっぱり、お前と2人で一般人達がいる場所に来ると、いつも以上に視線が痛く感じる……」

「……ああ………そうですね。和哉さんは美人ですし、俺も顔は整って

ますから」

「美人言うな、この二枚目野郎」

「ありがとうございます」

「褒めてない」

こいつと一緒にいると、1人である時よりも周囲の視線が集まる。特に女性。……耳を澄ますと、”カツコいい”だとか”キレイ”だとか”どうゆう関係だろう?”とか……いろいろ聞こえてくる。

……その時、何かが割れる音と、何かが倒れる音がした。

「——う”あ!?ああつ、があ、あ……………」

俺と秀一が座っている席の隣……4人席に座っていた若い男女4名のうちの男性1人が、急に椅子ごと床に倒れ、苦しみ……動かなくなった。

それを見た俺と秀一が席から立ち上がり、男性の元に駆け寄ろうとして——

「——失礼!」

それよりも先に、50代くらいの眼鏡を掛けた男性が駆け寄り、的確に倒れた男性の脈を確かめる。そして同じように駆け寄ってきた、40代くらいの長身で顔立ちの整った男性が、脈を測っている男性を呼ぶ。

「——右京さん、彼は……」

「……手遅れ、ですねえ。——亡くなっています」

「……そん、な、嘘……嘘よ……嘘でしよ、——さんっ!!」

亡くなった男性の隣に座っていた女性が、悲鳴を上げるように男性



の名前を呼び、その体にしがみついて泣き出した。

そんな女性の泣き叫ぶ声を聞きつつ、周辺の観察をしながら……頭は、別の事を考えていた。

（——何故、彼がここにいるんだ……!?!）

いや、レストランにいるのは彼だって飯を食べに来たんだろうし、ここは日本だからいてもおかしくはない。しかしだからって、まさかこんな形で再会する事になるなんて！

……とりあえず今は関係ない事だし、混乱を招かないよう、せめてこの事件が解決するまでは初対面の振りをしておこう。

「——では、こちらの件が終わり次第、そちらに戻る。……ああ。了解した」

秀一が電話を終わらせて、こちらに戻って来た。

「和哉さん。連絡してきました。あまり無理はしないように、との事です」

「ん、ありがとう」

事件に巻き込まれてしまった以上、いつ合同捜査本部に戻れるかは不明となってしまう。よって、秀一にはその旨をジエイムズに報告して欲しいと頼んだのだ。

「それから……事情聴取にはしつかり応じる事。また、身分を明かしても構わない、だそうです」

「……了解」

……やがて、店員の通報によって警視庁の人間がぞろぞろとやって来た。

「——なっ!?!警部殿に冠城!?!」

「何でここにいますか!?!」

「あ、伊丹さんに芹沢さん。どうも。……このパスタを食べてみてくて、僕が予約を取って、ついでに右京さんを誘ったんですよ」

「僕もこのレストランのパスタはとても美味しいと聞いた事があったので、冠城君の誘いを受けてここへ……」

「……けっ。昼食にイタリアンですか。優雅なことだ!」

「……特命係のいるところに事件あり、ですね……死神かよ」

「芹沢さん、それはさすがに心外です!右京さんはともかく僕は違いますよ」

「そんな事はどうだっていい!とにかく、我々捜査一課の邪魔はしないようにな、特命係……!」

警視庁からやって来た2人の男が、右京さんと呼ばれていた男と、冠城と呼ばれた男を見て驚いていた。……伊丹さんと芹沢さんと呼ばれていた2人の男は、彼らの事をあまり良く思っていないようだ。特に、伊丹という男は。

「……………彼らは、部署が違う人間同士のようにですね」

「……………そうだな」

秀一と小さな声で話しながら、様子を窺う。

その後。事件発生時に被害者の近くにいた若い男女3名——シヨートヘアの女性、穏やかそうな細身の男性、体格がガツシリとし

ている男性——や俺達2人は、その場所に留まったままでは検死等の邪魔になるため、店内の隅で待機するようにと言われ、そちらに移動した。

……やがて、捜査一課の2人の刑事がやって来る。2人はまず、俺達に声を掛けてきた。……見せられた警察手帳には、伊丹憲一と、芹沢慶二という名前が記されている。

「警視庁捜査一課の、伊丹と申します」

「同じく、芹沢です」

「お2人が被害男性とこちらの3名が座っていた席の、隣にある2人席に座っていた事は、間違いありませんね？」

「ええ」

「間違いありません」

「……では話を聞く前に、お2人のお名前とご職業を教えてください」

「分かりました。……しかし、その前に——1つ、お願いしたい事があるのですが」

「……んん？」

俺の言葉に、伊丹刑事が眉をひそめる。

「あなた方にも、被害男性のお知り合いである男女3名の方にも………あー、そちらの眼鏡を掛けた警察の方と長身の警察の方にも、お願いします。——我々の職業を知っても、あまり大きな声を上げないように」

「………よく、分かりませんが……まあ、いいでしょう」

伊丹刑事がそう言って頷くと、他の人達も頷いた。

「………秀一」

「はい」

秀一と2人で、懐から身分証を取り出した。

「——FBI捜査官の、荒垣和哉と申します」

「——同じく、赤井秀一です」

「Fび、ムグ!?!」

全員驚愕していた中で、芹沢刑事と“冠城”が大声を上げそうになったところ、それぞれ伊丹刑事と“右京さん”がその口を片手で塞いだ。

「なるほど………荒垣さん、でしたか?」

「……はい」

「あなたが大声をあげないようにと言った理由、理解しました。……確かに、今まさに世間で話題になっているFBIの方々がいる事が周囲に広まれば、大事になりますからねえ……」

「——ご配慮に、感謝します」

そう。黒の組織が壊滅し、組織のボスと幹部のラムを逮捕した後。“世界的に活動していた凶悪な犯罪組織が、日本の公安警察とアメリカのFBIによる合同作戦によって壊滅した”、と世界中に大々的に報告されたため、俺達FBIと公安警察はかなり有名になっている。よって……ここで大声を上げられると、いろいろと困った事になってしまうのだ。

「……FBIの方々が、何故こんなところに?」

「何故、と言われましても……部下の赤井がこの店を予約してくれて、昼食を取るためにここへ……」

「上司が、1度はこここのパスタが食べてみたい、と言っていたので」「………あんた達もかよ……」

うんざりとした表情で、伊丹刑事がそう言った。

「にしても……ハーフに見える赤井秀一さんはともかく、荒垣和哉さんは純日本人でしょうか？」

「……ええ。そうですよ」

「それが、FBIねえ……純日本人なのに、アメリカの犬をやってるんですか。それはそれは、」

「——ホー……う？」

「っ!？」

秀一の声が常より低くなり、口の端がつり上がる。……しかし、目は笑っていない。きつと、ここに一般人がいなければ殺気まで出していただろう。

そんな秀一の凄みに、伊丹刑事と芹沢刑事の肩が震えた。”右京さん”と”冠城”は身構えている。

「秀一。落ち着け」

「しかし、」

「——秀一」

「……すみませんでした」

俺が再度呼ぶと、秀一は大人しく引き下がった。

「……私の部下が大変失礼いたしました。……ところで、我々に聞きたい事があるのでは？」

「あ、……そう、でしたね、はい……では、事件が起きた時の事を聞かせてください」

「分かりました。それでは——」

話を本題に戻し、事件が起きた時の状況について伊丹刑事に質問さ

れ、それに秀一と2人で答えていく。

「——なるほど。ご協力、ありがとうございます。もう結構で、」  
「ああ、すみません。僕からも質問があるのですが……」

と、”右京さん”が割り込んできた。

「っ、警部殿……!!」

「すみませんねえ、伊丹さん。……お2人にお聞きしたいのですが——こちらの男女3名と被害男性が席を立った順番や回数を、覚えていますか？」

「!」

——へえ。

「——もちろん、覚えていますよ。我々の方が先に店内にいたので、彼らが4人席に座った時から……最初から全て、記憶しています。……お前も覚えてるよな? 秀一」

「はい。全て覚えています」

「え」

「何いつ!!」

「ええっ!」

”冠城”と、刑事の2人がぎよつとした表情で俺達を見る。若い男女3名も同じ表情だった。……俺も秀一も職業柄、周りを常に観察する癖がついていただけなのだが……そんなに驚く事か?

「素晴らしい。……では、最初からお答えしてもらえませんか?」

「いいですよ。……秀一。とりあえず俺が話していくから、もしも何か間違いや抜けている部分があったら、言ってくれ」

「了解しました。……もつとも、あなたに限ってそれはないと思いま

すが……」

「念のためだ。……さて。まずは——」

それから、彼ら4名の席を立った順番や回数について、彼らが席に座ってから事件が起きるまでの、全てを答えた。……秀一からの指摘がないので、おそらくこれで合っているはず。

「——これで、以上です」

「ありがとうございました。……皆さん。彼の言葉に、間違いはありませんか?」

「……は、はい……間違いありません……」

「ぼ、……僕も改めて思い返してみた、けど……その人の話の中に間違いは……全く、なかった」

「ああ……その通りだったぜ。間違いない」

「マジ、かよ」

「すっげえ記憶力……!!」

「………凄いな……もしかして、記憶力は右京さん並み……?」

俺の話をして3人が肯定し、刑事2名と“冠城”がそんな声を上げる。

(……俺の話が肯定されたという事は、被害者と彼ら3人の事件前から事件直後の行動は、これで確定……か)

よし。これで——

「——これで、毒物が仕込まれた時がいつなのか、探り易くなりましたねえ……荒垣さん。改めてお礼を言います」

「っ、……いえ。お役に立てたようで、何よりです」

”右京さん”が、静かにそう言った。……やはりな。それを探り易くするために、俺に聞いてきたのか。

そして、”右京さん”の声が聞こえたのか、伊丹刑事が彼に問い掛ける。

「ちよ、ちよつと待つてください、警部殿！……毒物つてのは？」

「言葉の通りですよ。……僕の見立てでは被害者の死の直前の様子からして……死因はおそらく、何らかの方法で毒物を仕込まれた事による、毒殺だと思われます」

「……つまり、右京さん。あなたは——犯人が彼ら3人の中にと、そう言いたいわけですか？」

「その可能性は、高いと思っておりますよ。あとは、鑑識の検死結果次第ですねえ」

……なんて言っているが、おそらくはもう確信しているのだろう。

被害者は——他殺である、と。

「……ところで……警部殿、と呼ばれているようですが、あなたのお名前は？……それに、横にいる長身の警官の名前もまだ聞いていません。ついでに教えてもらえますか？」

「ついで、つて……はつきり言いますね」

……おつと？どうやら秀一は”右京さん”に興味を示したらしい。  
”冠城”にも名前を聞いたのは、ついでのようなのだが。

こいつが自分から他人の名前を聞く時は、大体がその相手に何らかの興味を示した時だからな。

「ああ……これは失礼いたしました。——警視庁特命係の、杉下右京と申します」

「ついでに名乗りましょう。——同じく、特命係の……冠城亘です」

「……その、特命係とは？」

「ただの、窓際部署ですよ」

「——窓際部署、ねえ……？」



似合わない、というか。——似合う、というか……

(まあ——らしいといえ<sup>ば</sup>、らしいかな……)

## I F ① 再会 後編

……その後。検死結果から、被害者が死亡したのは、毒殺によるものだと判明した。……そこからの展開は、早かった。

俺達が出すまでもなく、杉下警部達が犯人を特定したのだ。……犯人は、被害者の友人である男性2人のうち、穏やかそうな細身の男性の方だった。

簡単に言えば、被害者の恋人であるショートヘアの女性に、犯人である男性は横恋慕しており……それに関する被害者への嫉妬がきっかけとなったらしい。

4人で食事をする日が決まった時から準備を始めて、今日に備えて毒物等を用意し、犯行に及んだのだ。

「酷い……酷いよ！私も、——さんも、あなたの事を信じていたのに!!あの人、ずっと今日が来る日を楽しみにしていたのに……!」  
「なんで、なんでそんな事をしたんだ!お前、そんなに彼女を——から奪いたかったのか!」

被害者の恋人ともう1人の友人である体格のいい男性が、悲痛な声を上げる。それに対して犯人は、身勝手な言葉を告げた。

「彼女と、——と出会ったのは、僕の方が先だった!僕の方が先に好きになったんだ!それをあいつが横取りしたんだ!!許せるわけがない!!」

すると、犯人の目の前に立った杉下警部が、口を開く。

「……僕は生憎と、恋愛には疎いのですが……それでも、これだけは分かれます。

たとえば、自分が恋をしていた相手と自分の友人が恋仲になり、あな

たがその友人に嫉妬するようになったのだとしても――

――あなたの友人であると同時に、あなたが恋をしている女性の大切な存在でもある男性を、殺してもいい理由にはなりませんよ!!」

「っ、うるさい……うるさいうるさいうるさい!!……そうだ、あんたのせいだ……あんたのせいで計画が台無しだ――!!」

「っ、右京さんっ!!」

「警部殿!!」

そう叫んだ犯人が、懐から折り畳み式のナイフを取り出して、杉下警部に飛び掛かった。冠城巡査と刑事の2人も叫ぶ。……その時、既に俺と秀一は動いていた。

俺は杉下警部と犯人の間に割り込み、犯人が持っていたナイフを叩き落とす。

その瞬間。犯人の背後を取っていた秀一が、犯人の両腕を取って取り押さえた。

「よし。そのまま捕まえとけよ、秀一」

「了解」

「くそおっ！離せ、離せえっ!!」

「――おい、てめえ」

「ひっ!?!」

犯人が俺の顔を見て、悲鳴を上げた。……きつと今の俺は、相当冷たく、恐ろしい表情をしているのだろう。現に同じように俺の顔を見た秀一が、見事に固まった。そして、その表情が少し青くなる。

……それでも犯人をしつかり押さえているあたり、こいつはやはり優秀である。

「自分の失敗の責任を、他人に押し付けるな。ましてや、その他人にナイフを向けるなんざ正気の沙汰じゃねえ。そして何よりも――

――この俺の目の前で、彼に手を出そうとしやがったな?」

……ふざけんじゃねえぞ、このクソガキがあっ!!」  
「ひいっ!!?」

……頭に血が上っている。それは理解しているが、どうしても怒鳴らずにはいられなかった。

だって、彼は俺の——

「——和哉君」

「っ!!」

背後から、肩に手を置かれた。振り返ると、彼が——右京さんが微笑んでいる。

「落ち着きなさい。……この通り、君のおかげで僕は無事ですから」  
「……………」

……そうだな。落ち着こう。……深呼吸をして、頭を切り替える事にした。

「……すみません。取り乱しました」  
「いえいえ、構いませんよ。……それより、君に怪我はありませんか?」

「ありません。ナイフには当たっていませんよ」

「……それは良かった。——大事な甥っ子に怪我をさせたとなれば、君の叔父としての立場がなくなりますからねえ……」

「……………ホー……………」

「えっ、」

「んん!?!」

「……………右京、さん?今……………荒垣さんを、何て呼びました……………?」

「甥っ子、と呼びましたが……………それが何か?」

「……………」

「……………」  
「……………」

「二——えええええつ!!」

……ある程度混乱するだろうとは思っていたが、まさかここまで驚かれるとは思わなかった。

それに対して、秀一は目を見開いているものの、そこまで驚いていない。

「……和哉さんの態度から、おそらくあなたと杉下警部の間には何らかの関係があると考えていましたが……まさか、血縁関係にあったとは……」

……さすがだな。俺と右京さんが顔見知りである事には気づいていたのか。

「叔父と、甥っ子!?!」

「こ、こんな若造が警部殿の甥っ子、だと!?!いくらなんでも若過ぎる……」

「ああ……和哉君はこう見えて、38歳の立派な中年男性ですよ?」

「はあつ!?!」

「さ、38つて、えつ?……えつ!?!」

「いやいやいやいや!?!どう見ても20代にしか見えませんが!?!」

……あ、荒垣さん。本当なんですか……?」

「……ええ。本当ですよ、冠城巡査。」

というか右京さん。なんで今バラしてしまったんですか?そのせいで、皆さん大混乱してますよ。せめて事件が完全に解決するまでは黙っていて欲しかったんですが?」

「おや?もう”右京叔父ちゃん”とは呼んでくれないんですか?」

「っ、いつの話してんだよあんたは!!」

それはまだ俺がガキだった頃の話だろうが!!

「……………」 右京叔父ちゃん」

「お前は復唱すんじゃないよ、秀一！」

それからその目を止めろ。” 微笑ましい”とか” かわいい”とか  
思うな!!

「とりあえず捜査一課の人!この犯人どうします?」

「お、おう!そうだったな!……………おい!こいつを連れて行け!!」

伊丹刑事達とは別の捜査一課の人達が、犯人を連行して行った。

その後、まず一般人であるショートヘアの女性と体格のいい男性は、後日調書を取るために呼び出す場合がある事など、その他もろもろを伝えられてから、解放された。

他の捜査一課の人達も撤収作業に入り、この場には俺と秀一、伊丹刑事と芹沢刑事、それから右京さんと冠城巡査が残る。

芹沢刑事が俺達に向き直り、口を開いた。

「……………まずは捜査へのご協力、ありがとうございました。……………お2人も後日、調書を取るためにお呼び出しますので……………面倒だからといって逃げたりしないよう、お願いしますよ?」  
「もちろん、分かっていますよ。我々も警官ですし、調書の重要性はよく知っていますから」

「我々のボスからも、そちらに協力するようにと言われています」  
「……………それなら、いいですけどね……………」

芹沢刑事が引き下がると、今度は伊丹刑事が俺を見据えて口を開く。

「……あんた達も、特命係のように首を突っ込んでくるのでは、と警戒していたが……なるほど。警部殿の甥っ子ともなれば、警部殿の能力についてはよく知っているだろうし、自分達が手を出すまでもなく、放っておけば自分の叔父上が解決してくれるだろうと……そう考えたわけですか」

「……………ん？」

……どうやら、盛大に勘違いされているらしい。

「……失礼ながら申し上げますが、伊丹刑事。あなたは勘違いしています」

「……………何？」

訝しげに俺を見ている彼に、俺は苦笑いを向ける。

「——日本警察は、優秀です。我々FBIは、日本の公安の方々にとっても助けられました。……だから、彼らと同じく日本警察に所属しているあなた方の捜査に首を突っ込む事なんて、しません。邪魔になつてしまいます。……私は、あなた方の邪魔はしたくありません。そんな事をすれば、我々の同士となつてくれた公安の方々に申し訳が立ちませんから。」

まあ、そもそも手を出す必要性がないと考えていたんですが、ね。だって、俺は右京さんだけを信じていたわけではなく、あなた方全員を——日本の警察官を、信じていたんですよ？」

「——俺の本来の故郷を守ってくれる、立派な警察官であるあなた方を信じるのは、おかしい事ですか？」

……すると伊丹刑事は、啞然。……目付きの悪い強面の顔がコミカルな表情に変わって、なかなか面白い。

「せ、先輩先輩！ちよつと……！」

芹沢刑事が、そんな彼の腕を引っ張って一緒に離れて行った。その先で、ひそひそと話をしている。……どうしたんだ？

「……どうするんですか！」

「どうする、って……」

「だって先輩、あんなに俺達の事を信頼してくれてる人に、滅茶苦茶失礼な事言っただでしょう!？」

「ぐっ……」

「確かに、言っていましたよね。」純日本人なのにアメリカの犬をやっている”とか、”こんな若造が”とか、その他もろもろ……」

「うおっ、……ヌルツと会話に入ってくるんな冠城……！」

「——ええ、全くですねえ。僕の大事な大事な甥っ子に、とても失礼な事を言っていましたよねえ……？伊丹刑事」

「ひえ」

「け、警部、殿」

「もちろん——謝りますよ、ねえ？」

「………ハ、ハイ………い、いくぞ芹沢！」

「えっ、俺も!？」

「先輩の俺が謝るんだから後輩のお前も謝るんだよ！連帯責任だ!!」  
「理不尽!？」

……途中で冠城巡查と右京さんも一緒に、何かを話していたようだが、突然、伊丹刑事が芹沢刑事を引きずりながら、俺の前にやって来た。

「……あー、その……えー……」



「……先輩！」

「分かってる！……その、——すみませんでした」

「すみませんでした！」

「……………えつと？」

2人が、俺に向かって頭を下げた。……いきなりどうしたんだ？

「……日本の警察官を信頼してくれるあなたに対して、大変失礼な真似をしました。申し訳ございませんでした」

「大変失礼いたしました！申し訳ございません！」

すると、背後で殺気が膨れ上がった。……今は一般人もいないから、歯止めが利かなくなつたんだな。

頭を下げている刑事2人は体が震え、俺達を見守っている右京さん達は冷や汗を流している。

「——今さらか？あれだけ和哉さんを貶しておきながら、今さら謝罪など……………！」

「秀一……………」

「……俺は認めない。確かに我々は日本警察に煙たがれてもおかしくはないが……それでも彼を……和哉さんを侮辱するなんて——万死に値するぞ」

「秀一、」

『せっかく——いつも頑張っている和哉さんのために同士達が時間を作ってくれて、和哉さんだつてあんなに楽しそうにしてたのに、殺人事件でそれを台無しにされるわ俺の唯一無二を侮辱されるわ——今の俺は最高に機嫌が悪いんだよ……………!!』

「——」

……………なんだ。こいつ、そんな事を考えていたのか。——同士達と、俺のために、こんなに怒っているのか。

だがしかし。そうだとしてもやり過ぎなので、

「――赤井秀一」

「っ、」

「――Stay<sup>待</sup>て」

「――Yes, master<sup>はい、ご主人様</sup>」

外だけど、今回ばかりは仕方ないので、いつものように犬扱い。

「……伊丹刑事、芹沢刑事。頭を上げてください。……私の部下が、度々申し訳ない事をしてしまいました。すみません」

「えっ、あ……いえ……」

「さて、謝罪についてですが。もちろん、ありがたく受け取ります。……また、先ほどまでの部下の行動について、改めて謝罪します。……申し訳ございませんでした」

「……先ほどは、失礼いたしました」

俺が頭を下げると、それに合わせて秀一も頭を下げる。……ちやんと頭は冷えているようだ。よし。

「……あー、……えー……っ、我々も、あなた方の謝罪を受け取ります。ですので、頭を上げてくれませんか？」

「……ありがとうございます」

俺達が頭を上げると、2人は神妙な面持ちをしていた。伊丹刑事が口を開く。

「……荒垣さん」

「何でしょう？」

「あなたは、何故我々に怒りをぶつけないんですか？……俺としてはあなたの部下の反応こそが……まあ、少し過剰ではあるものの、当然

の事だと思いましたがね」

「……それは……私も赤井も、自分自身の事を侮辱された程度では、別に怒りませんよ。その程度なら我慢すればいいだけの話です。……しかし——自分以外の、大切な存在を侮辱されたら、そうはいきません」

「……………」

「だから赤井は……少々過剰ですが、怒りました。私のためにね。……そして私も、もしあなたが彼を侮辱していたら——烈火の如く、激怒していたでしょうね。それこそ、先ほど犯人が私の叔父にナイフを向けた時のように、怒鳴っていたはずです。……あなたも、部下や仲間を侮辱されたら、同じように怒るのでは？」

「……………まあ……そう、ですね」

「それと同じ事です。……それに、私は先ほど言いましたよね？あなた方の邪魔をしたくない、と。無駄に感情を爆発させて、あなた方の邪魔になるような事をしたくなかったんですよ」

「……………」

「……………」

……黙り込んだまま、伊丹刑事と芹沢刑事が顔を見合わせて、それからまた俺を見た。

「……荒垣さん。失礼な事を聞くようで、申し訳ないのですが——あなた、本当に杉下警部の甥っ子ですか？」

「えっ？」

「いやね。あなたが常識人過ぎて、先輩も俺もちよつと疑い始めてるんですよ。本当にあの警部殿と血が繋がっているのかって……あ、違いますよ!?別に警部殿を侮辱するつもりは全くなくて……!!」

「……………あ——」細かいところまで気になるのが、僕の悪い癖、”妙ですねえ”、”一つよろしいでしょうか”、最後に、もう一つだけ”……といった右京さんの口癖に聞き覚えは、”

「あります!!」

「なるほど——理解しました。あなた方も彼に振り回されてますね？  
……この言葉は、目上の方に使うべき言葉ではないと分かっています  
が……あえて、使わせていただきます。——心中、お察しいたします」  
「……荒垣さん……！」  
「荒垣さん、あんた良い人だな!!」

2人の俺を見る目ががらりと変わった。……いやー単純、ゲフン。  
……素直な人達だなあ。気持ちはよく分かるが。

「……和哉君。いろいろと物申したい事があるのですが、」  
「今俺は伊丹刑事達と話をしてる途中なんだ。ちよつと静かにしてくれ右京叔父さん」  
「……君にそう言われては、仕方ないですねえ……」  
「「えっ」」

右京さんが引き下がると、冠城巡査達が彼を2度見した。……俺は滅多に叔父さんと呼ばないから、ここぞという時に叔父さんと呼ぶと、この人は意外と従ってくれるのだ。

「で、本題に戻しますが……確かに私は、彼の甥ですよ。私の母が彼の姉でして。……彼には私がまだ日本に住んでいた頃に、何度か遊んでもらいました。

それ以降も、ごく稀に私が来日しては彼と会って話をしたり、時には彼の方からアメリカにある私の実家に遊びに来てくれたり……それなりに交流を続けていました」

「へ、へえー……」  
「……全く、想像できないんですが」  
「……それにしても、君がFBIになる前に1度会った日以降、会う事はありませんでしたが……まさかこんな形で再会する事になるとは……最初に見た時は、最後に会った時と見た目がほとんど変わっていませんでしたよ」

「童顔で悪かったな!!」

「そうは言つてませんよ……」

その時。俺の携帯に着信があつた。

「おつと。……失礼」

秀一達から離れて、電話に出る。……相手はジエイムズだった。俺達の状況が気になつて電話を掛けてきたらしい。

事件が解決した事と、後日調書を取るために警視庁に行く事、これから合同捜査本部に戻る事を伝えた。

電話を終えてから彼らの元に戻り、まず秀一に声を掛ける。

「ボスからの電話だった。……仲間達もみんな心配しているようだ。そろそろ戻ろう」

「はい」

「……では。我々はそろそろ失礼します」

「ああ、ご協力ありがとうございました」

「ありがとうございます!」

それから。秀一と共に店の出口に向かおうとして……ふと、振り返った。

「そうだ、右京さん」

「何ですか?」

「おふくろが心配してましたよ」

「……………はい?」

「最近、連絡の1つも寄越さないって。……俺とはたまにメールのやり取りするのに、おふくろとはやらないんですか?」

「……彼女は、苦手なんですけどね……」

「まあ、あの人はマイペースなんで、その気持ちは分かりますが……あ

まり、俺のおふくろに心配させないでくださいよ、叔父さん」

「む……」

「それに……おそらく無いとは思いますが、おふくろの明らかに沈んだ様子を見たら、そのうち親父が介入するかも……」

「近いうちに彼女に連絡します」

「賢明な判断だと思います。……では、失礼します」

今度こそ、秀一と共にその場を後にした。

「……………さて。……言ってしまったからには、近いうちに連絡しないですねえ……………」

「……………右京さんにも、苦手な人っているんですね。……彼の母だというあなたの姉や、彼の父親って……………どんな人達なんです？」

「そうですね……………僕の姉にして、彼の母親である彼女は、マイペースで穏やかで……………心配性な女性です。そして父親……………僕の義理の兄は——読めない人、です」

「……………読めない……………？右京さんが？」

「ええ。……既に引退してしまったものの、FBIではかなりの敏腕捜査官として有名だったと聞いています。……和哉君は間違いなくその血を引いていますから、いずれ父親と同様に、有名になるでしょうねえ……………」

「……………へえ……………」

「……………ただ。彼の父親について、1つ、分かっている事があります」  
「ほう？」

「もしも万が一、僕の姉や和哉君の身に何らかの危害を加えられた時

……彼の父親は——悪鬼羅刹の如く怒り狂い、彼らに危害を加えた原因を、尽く潰しに掛かるでしょう……」

「……………え？……………ちよ、右京さん？荒垣さんの父親って……………そんなにおっかない人なんですか!？」

「ええ。それはもう……………僕も絶対に、怒らせたくない人なんですよ。……………そんな恐ろしい人の息子である和哉君もまた、怒らせると怖いんです」

「それは……………彼が右京さんを守った時に、その片鱗が見えましたね……………僕、あの絶対零度の目には思わず震えました」

「彼の父親が怒った時は、あれの数倍は恐ろしいと思ってください」

「……………ひえー……………おっかない……………で、右京さんはもしかして、その人の事を怒らせた事があるんですか?」

「——ノーコメント」

「それ、答え言ってますよね?ねえ?」

「——ノーコメント」

I F ② 花の里にて 前編

例のレストランで起こった殺人事件から数日後の、夜中。……俺は秀一と共に、あの事件の事情聴取を受けるために警視庁に来ていた。調書作成のための事情聴取という事で、それなりに時間を取られるのだろう。

念のために俺も秀一も、今日終わらせる必要がある仕事は全て片付けてある。この事情聴取さえ終われば、今日中にやるべき事が全て終わるのだ。……秀一とは、もしも予定より早めに終わったら、久々に2人でどこかに飲みにも行こうと話していた。

警視庁内にて。俺達はそれぞれ別の部屋で事情聴取を受ける事になった。俺には伊丹刑事が、秀一には芹沢刑事が取調を行う。

……やがて、俺の方は特に問題なく終わった。まだ秀一の方が終わっていないため、伊丹刑事と共にそれが終わるのを待つ事に。

「……あなた方もお忙しいでしょうに、こちらの都合でこんな夜中に事情聴取をさせる事になってしまって、大変申し訳ない……」

「ああ、いやいや。荒垣さん達もいろいろと忙しいんでしょう。お互い様ですよ。……むしろ、こちらとしては久々にまともな取調を行う事ができて、安心しました」

「……それは、どうゆう事です……？」

「……ここだけの話ですがね。……今までに何度も、取調中に乱入された事があるんですよ——あなたの、叔父上に」

それを聞いた瞬間。俺は即座に頭を下げた。内心では土下座していた。うちの叔父が本当に申し訳ありませんでした!!

誠心誠意謝罪していたら、逆に伊丹刑事の方が焦ってしまった。頭を上げて欲しいと言われたため、渋々それに従う。



「……私の叔父が大変失礼な事を……！今度叔父と顔を合わせる機会があつた時に、よく、言い聞かせておきますので……!!」

「あ、それは是非お願いします!!」

「はい、お任せください。……それから、叔父が暴走した時に”甥っ子に言い付けますよ!”とでも言つてもらえれば、多少は効果が見られるはずですから……方が一の時はそう言つてみてください」

「ありがとうございます……！方が一の時の切り札としてありがたく使わせていただきます……!!」

伊丹刑事と、がっちりと握手を交わした。

……その後。取調を終えた秀一と合流し、伊丹刑事と芹沢刑事に見送られて警視庁を後にした。……すると、前方に見覚えのある人影が2つ。

秀一を見ると……軽く頷いて了承してくれたので、2つの後ろ姿を指して駆け寄る。

「——右京さん！冠城巡査！」

「おや？」

「あれ?!荒垣さんに……赤井さん?どうしてここに?」

俺が声を掛けると2人——右京さんと冠城巡査が振り向き、それぞれが驚く。

「例の事件の事情聴取を受けるために、ここに来ていたんです」

「なるほど、そうでしたか……」

「右京さん達はこれからどちらに?」

「僕達の行き付けの店に行くところですよ。……ああ、そうだ。もし良かったら、君達も一緒に行きませんか?もちろん、何も用事が無ければですが……」

「……………あー……………」

叔父の誘いはありがたいし、久々に飲み食いしながらいろいろ話したい。

しかし……先に秀一と2人で飲みに行く約束をしたからな……

そう思つて、秀一を見ると……目が合った。秀一は黙つたまま小さく微笑み、”あなたのお好きなように”と伝えてくる。……ごめんな。ありがとう。

「……ありがとうございます。俺達も是非、ご一緒させてください」

右京さん達の案内で、”花の里”という小料理店にやって来た。……元々、彼から行き付けの店の事はよく聞いていたが……確かに右京さんが好みそうな、良い雰囲気のお店だな。

右京さん達に続いて中に入ると、1人の女性がいた。……彼女が月本幸子さんかな？右京さんに聞いていた通り、美人な女将さんだ。

「いらつしやいませ。……あら？そちらの方々は……？」

「僕がここに誘いました。彼らは、FBIの優秀な捜査官達なんです」  
「え、FBI!?今ニュースで話題になっている、あの?」

「ええ、そうです。……とりあえず、座りましょうか。……あ、冠城君。君、今日はいつもの席を交換してください。君がいつも座っている席を、僕が使いますから」

「えっ?……ああ、なるほど。分かりました。どうぞどうぞ」

店内のカウンター席に、俺と右京さんを間に挟むようにして並んで

座る事になった。俺の隣に秀一。右京さんの隣の角の席に、冠城巡査が座る。

「珍しいですね……右京さんが冠城さんと席を交代するなんて……」

「それはそうですよ、幸子さん。今日は荒垣さんがいますし」

「荒垣さん……？」

おっと。そういえば自己紹介がまだだったな。

「ご挨拶が遅れてしまい、申し訳ありません。FBI捜査官の、荒垣和哉です」

「同じく、赤井秀一と申します」

「月本幸子さん、ですよね？あなたの事は、叔父からよく話を聞いていました。とても美人な女将さんだと……」

「あ、あら……それはありがとうございます、す……？」

首を傾げた女将さんは、恐る恐る俺に問い掛ける。

「……あのお……叔父、って……？」

「僕の事ですよ」

「え」

「……叔父の言う通り、私は彼の甥なんです。私の母親が彼の姉です……母方の叔父、という事になりますね」

「ちなみに先手を打って言うておくと、荒垣さんは今年で38だそうですよ？」

「――」

……女将さんは、見事に固まってしまった。頭の理解が追いつかないのだろう。それを見兼ねた右京さんが、彼女に声を掛けて再起動させた。

我に返った彼女は、俺と右京さんを交互に見て目を白黒させる。

「え、ええええっ!? ほ、本当に右京さんの甥っ子さんなんですか!? それも38!? うそ、全然似てないし見えない!! どう見ても20代半ばか後半ぐらいにしか…って、あ、ごめんなきいっ!!」  
「ぶふっ!?!」

冠城巡査が嘔き出した。多分、全然似てないというところに笑ったのだろう。

「ふ、ははははっ…!! つ、全然、似てないって! バツサリ…、あっちははは!!」

腹を抱えて大爆笑している。…隣から、冷気が発せられた。

「——冠城君…?」

「あ、ハイすみませんでした!!」

即座に笑いを止めて謝った。…上下関係はとづくに決まっているようだ。まあ、右京さん怒ると怖いからな。

さて。気を取り直して、女将さんにそれぞれ料理や酒——冠城巡査と秀一がワイン、俺と右京さんは日本酒——を注文した。

先に注文した酒が行き渡ったので、俺は右京さんの目の前にある徳利を持つ。

「右京さん。お酌しますよ」

「おや、ありがとうございます」

右京さんが持つお猪口に酒を注ぐ。…何故か、彼は上機嫌だ。

「……君とお酒を飲める日が来るとは……感慨深いです……」

「そんな年寄り臭い事を……」

「実際に、もう年ですからねえ……」

「なに、あなたならまだまだいけるでしょう」

「……君にそう言われると、不思議とそう思えてきますねえ……もう少し頑張ってみますよ」

「そうしてください」

会話の途中、秀一の手が俺の前にあつた徳利を掴んだため、その意を察してお猪口を持つ。……ちょうどいいところまで注いでくれた後、徳利を置いた秀一に視線を送って礼を伝えた。

その礼代わりに俺も秀一のグラスにワインを注いでやろうとしたが、首を横に振って遠慮してきたので、仕方なく引き下がる。

その後。注文した料理も行き渡り、飲み食いをしながら会話を始める。

「……ほう……冠城巡査は元々法務省にいたんですか」

「ええ、まあ……いろいろあつて退官して、右京さんがいる特命係に所属する事になりました」

「所属する事になった、というよりも……無理矢理戻つて来た、という表現の方が正しいですねえ」

「そこまでして戻つて来た僕の事を褒めてくれてもいいんですよ?」

「それはあり得ません」

「はっはっは、手厳しい」

……会話に遠慮がないな。どうやら、右京さんはある程度彼の事を信頼しているらしい。

「そうだ、荒垣さん。右京さんに関する面白い話とかがあつたら是非！教えて欲しいんですが……何かありませんか?」

「あ、それは私も気になります!」

「……和哉君。余計な話はしないでください」

「そうですね……………昔、俺にFBIになってもらいたい父と、日本の警察官になってもらいたい叔父の間で、ちよつとした小競り合いがあったらしいんですが……………その話でもしますか?」

「何それ超気になります!!」

「ちよつと待ちなさい。君、一体誰からその話を聞いたんですか?」

「お袋からです」

「あの人は……………」

それから楽しい会話——なお、叔父は冷や汗をかいている——が続いたが、会話の方向性を変えるためか、叔父が別の話題を切り出す。

「ところで、僕としては君達の話も聞きたいのですが。……………特に——かの有名な、FBIの銀の弾丸シルバードレットの話は気になりますねえ……………ちよつどその本人である赤井さんがいらつしやいますし、是非ともお話を伺いたい……………」

「……………ホー……………俺の事を知っているんですか」

「右京さん。一体どこからその情報を……………」

「僕にもいろいろと、つてがありますから」

「シルバードレット……………? 何ですか、それ」

疑問を口にした冠城さんの方へ振り返り、彼は口を開く。

「赤井さんの通り名ですよ。狼人間を唯一殺す事ができる銀の弾丸になぞらえているのだとか……………FBIの銀の弾丸シルバードレットといえば、凄腕のスナイパーとして広く知られています。」

さらに、今までに数多くの☒事件を解決に導いており、FBI捜査官としても一流だそうで……………」

「……………恐縮です」

「……………そして、本人がその実力を鼻にかける事がなく、出世にも興味がないのでは? という話も聞きましたが……………その様子を見るに、噂は事実のようですねえ」

「現場の方が性に合っていますから」

「……………赤井さんはそんなに凄い人だったんですか。知りませんでした」

冠城さんがそう言って、興味津々といった様子で秀一を見る。……秀一はというと、それとは真逆で興味無しといった様子でワインを口にしている。

そこでグラスの中身が空になったので、今度こそ俺が注いでやった。秀一は黙って軽く頭を下げた。礼には及ばない。

すると、俺が気になっていた鯖の味噌煮を、自分の皿から少し分けてくれた。……弟子にそんな事をされては、師匠の面子が保てない。だから、俺も秀一が気にしていた天ぷらを分けてやる。……申し訳なさそうな顔をされた。いいから遠慮せずに食べ食べ！

「……………で、そんな赤井さんが尊敬しているという事は、荒垣さんも相当凄い人だという事ですよね？」

「それは、」

「それはそうですよ。彼は俺の自慢の師匠ですから」

否定しようとしたら、秀一に先手を打たれた。……相変わらず俺が関係しているとレスポンスが早い！

「師匠？……………和哉君が、あなたの……………？」

「ええ。……俺に狙撃の技術や、パルクールの技術。事件捜査のいろはやFBIとしての心構えなどを教えてくれたのは、和哉さんです。もちろん、その技術等を磨いたのは俺自身である事は認めますが……それは、和哉さんによる教育という基盤があつたからこそです。それがあつたから、ここまで磨き上げる事ができたんですよ。」

——和哉さんの存在があつたから、今の俺はここに存在している「は、はあ……………」

「俺は和哉さんの唯一の弟子である事を心の底から誇りに思っています」

す。……それなのに、この人はいつも謙遜するんです。確かに、既に狙撃能力や戦闘能力、捜査能力等は俺の方が上です。それは認めます。しかしそれは俺が和哉さんの背中を追いつけ続けた結果であり、この人が俺の師匠で、俺がその唯一の弟子である事には変わりはない。一時期は免許皆伝なんて言いつて俺から離れようとしたが、そうはいきません。俺にはまだ、和哉さんから学びたい事が山ほどあるんですから」

「そう、ですか」

「和哉さんはまだまだ、俺が会得していない技術を数多く手にしています。それらを全て教えてもらいたいですし、これから先も共に成長していきたいんです。この人の存在は俺にあらゆる刺激を与えてくれます。この人が側にいてくれたら、きっと俺はもっと成長する事ができる。」

……だから、それを邪魔する奴は問答無用で抹殺——」

「——Quiet」

「……Yes, master」

……止めるのが遅過ぎたようだ。右京さんも冠城さんも月本さんも、みんな面を食らっている。……あまり効果は無いだろうが、一度咳払いをしてから取り繕う。

「あー、驚かせてしまって申し訳ない。こいつは酒が入ると饒舌になり、何故か俺を大袈裟に褒める言葉を毎回口にするんです」

いつもは酒が入っていなくても普通に口にするけどな！……つい、秀一を睨んでしまった。

ここは外だぞ外！お前の通常運転忠犬モードを知らない人達と一緒にいるんだから自重しろ！かろうじて表情は対外向けに無表情を保ってはいるが、その表情でさつきまで無口だった奴がいきなり饒舌になったらドン引きしてもおかしくないから!!



「秀」……お前本当に自重してくれよ？頼むから」

「……すみませんでした。……でも、先ほどまでの言葉は全て本心ですよ」

「はいはい」

「……本当ですからね？」

「分かった分かった」

「本当に分かってますか？」

「分かっているって言うてんだろ。つーかそんなもんはとづくに知っているんだよ。いちいち言われなくてもな」

それこそ毎日のように聞いているから、こいつが本気だって事はもう分かっている。

「……今日、君達と警視庁の前で会った時から思っていました……君達は本当に仲が良いですねえ。先ほどから言葉もなく意志疎通をされていて、その仲の良さは窺い知る事ができましたが……師弟というのは、そんなにも仲が深まるものなんですか？」

……え？

「え？……お2人ってそんな事してましたっけ……？」

「してましたよ。警視庁の前で会った時は何やらアイコンタクトで互いの意思を確認していたようです……ここに来てからも、会話もなく当たり前のように赤井さんが和哉君にお酌をして、和哉君も黙ってそれを受け入れていました。それからつい先ほど、互いの注文した料理をこれまた会話もなく分け合っていて……まさしく、阿吽の呼吸でした。」

……おや、どうしました？和哉君」

自身の叔父の言葉を聞き、俺は両手で頭を抱えた。

(――完つ全に、無意識だった……!!)

確かにそんな事をしていたよう、な?……駄目だな。うろ覚えだ。……秀一に自重しろって言った俺がそれでどうすんだよ……

「和哉君?」

「あ、ああ……すみません。ちよつと入りやすそうな穴があったらすぐにでも入りたいという気持ちにさせられただけでして」

「はいい?」

「いえ、何でもないです。そつとしておいてください……」

「はあ……?」

右京さん達は不思議そうにしていたが、秀一は俺の心情を察したよううで、俺の肩をポンポンと叩いてきた。同情はいらねえんだよ、とその手を払ったら今度は頭を撫でてきた。それも払った。

「――調子に乗るんじゃないぞ馬鹿弟子」

「おっと、すみません」

口では謝つていても、目が“微笑ましい”と言っている。……この野郎。後で覚えとけよ……!!

「……ふふ。……確かに右京さんの言う通り、とても仲が良いんですね……」

月本さんにまで似たような目で見られた。居たたまれない……だがしかし、逃げるわけにもいかない。

と、いうわけで。

「……あ、そうだ右京さん!伊丹刑事から聞きましたよ?あなたが今

までに何度も彼らの取調中に乱入していたと！」

話をすり替える事にした。

「駄目じゃないですか！真面目に仕事をしている彼らの邪魔をしないであげてください！」

「いや、しかし和哉君、」

「いやもしかしても無い！確かにあんたは子供のように好奇心旺盛だし細かいところが気になるのがあんたの悪い癖だという事も知っている。でもな、あんたのその行動に困っている人達がいるって事をいい加減理解してくれ！」

「う、」

「大体なあ、あんたはきつと自分がどう見られるかなんて気にしてないだろうが——俺とお袋は、嫌なんだよ。俺にとっては大事な叔父で、お袋にとっては大事な弟であるあんたが、周りから腫れ物扱いされてるところなんて——本当は見たくないんだぜ？」

「——」

「だから、ほんの少しだけでもいいから——俺達のためにも、自分のそういう行動を省みてくれよ。右京叔父さん」

思わず、情けない声を出してしまった。……この自由奔放な叔父は俺とお袋をよく心配させる。きつとこの言葉も、効果は少ししかないだろう。……それでも、言わずにはいられなかった。

「……………そう、ですね。——すみませんでした、和哉君。……少し、気を付けてみます」

「ん。ありがとう」

どうやら、少しは心に届いたようだ。今はこれで充分だろう。……ふと、視線を向けると……月本さんと冠城さんが、啞然とした表情で右京さんを凝視していた。……どうかしたのか？

「あの右京さんが素直に反省してる……!?!」

「明日は槍でも降るのか!?! いや、それどころか天変地異の前触れ……!?!」

……おい、叔父上よ。あんた一体普段はどんな振る舞いをしてるんだ……?!

I F ② 花の里にて 後編

花の里で飲み食いを始めてからそれなりの時間が経過した現在。飲み過ぎたのか、我が甥はカウンターテーブルに顔を伏せて眠ってしまった。そんな彼の肩に、赤井さんが自分のジャケットを掛ける。

「……………杉下警部は、和哉さんと一緒に飲むのは初めてですか？」

「?……………ええ、そうですか……………」

質問の意図が読めなかったが、赤井さんの問いに対してそう答えた。すると、彼は相変わらずあまり動かない表情をこちらに向けて……………しかし、なんとなく複雑そうな様子で、こう言った。

「……………和哉さんが、こんなにも無防備な状態で眠っているのを見たのは——これが初めてです」  
「……………」

「きつと、あなたがいるから……………安心して、眠っているのだと思います。普段ならこうはなりません。俺が知っている限り、例え酒を飲んでいたとしても酔い潰れて眠ってしまう事は、一度もありませんでした。……………この人は、人一倍警戒心が強いんです」

そう言いながら、彼は和哉君の頭をそつと撫でた。……………まるで、壊れ物を扱うかのような手付きで。

「……………そうなんですか?僕にはそうは見えなかつたんですけど……………今日を合わせてまだ2回しか会った事がない僕に対しても、結構気さくに話し掛けてきましたよね?」

「確かに、そうですね……………私も、凄くフレンドリーな方だと思ってました」

「ですよね?」

冠城君と幸子さんが互いに頷き合っている。……彼らはまだ和哉君の事を良く知らないため、そう思うのも無理はない。

「和哉さんは基本、敵対している相手や犯罪者……または、自分の大切な存在を害するような相手でない限り、誰に対しても友好的に接します。……しかし、それは決して警戒していないわけではありません。彼が本当に気を許す相手は、おそらくほんの一握り……そしてその一握りに含まれる人間こそ、和哉さんが心の底から信頼している人間だ」

「……なるほど。やはり彼の性質は、今でも変わっていないようですね……」

「……という事は、もしや和哉さんは昔から……？」  
「ええ……子供の頃は人見知りな子でしたが……それは、他人を警戒しているからこそその人見知りでした」

そう。彼は昔から、子供にしては他人への警戒心が強過ぎた。

彼の顔立ちはとても整っている。見た目は僕の姉に似たようで、言つては悪いが女性寄りの顔だ。……だからこそ、小さい頃の容姿はとにかく中性的で、女の子だと勘違いされる事も多かった。

そんな容姿に惹かれたのか……子供の頃、彼と何らかの形で関わろうとする子供や大人が、たくさんいた。……しかし、彼は誰に対しても気を許さなかった。——両親を除いて。

彼は、今も昔も変わらず、両親を愛している。他人には決して見せない表情や態度を、両親の前では隠す事なく素直に見せていた。両親の前でのみ年相応の子供になり、その警戒を解くのだ。また、僕に対しても両親ほどではないが、その傾向が見られた。

小学校に入学してからは、徐々に誰に対しても分け隔てなく接するようになっていったが……警戒心は強いままだった。ある程度は気を許す事ができる友人が数名できたようだが……僕の姉によると、例

え友人を相手にしても完全に気を許す事はなく、密かに線引きをしていたらしい。

つまり。和哉君に本当の意味で信頼される事は、非常に難しい事なのだ。

……義兄曰く、そうゆうところは自分に良く似ている、との事。義兄も幼い頃から警戒心が強かったようで、子供時代の和哉君と似たような行動を取る事があったそう。以前、自分の悪い部分が受け継がれてしまったが、とため息混じりにぼやいていた。

しかし、義兄は現役時代にその強い警戒心に助けられた事が何度もあったという。……きつと、和哉君も同じだろう。その性質は決して悪いだけではなく、良い面もある。義兄が責任を感じる必要は無いと思うが……それはともかく。

「……そんな事があつたんですね……でも、やっぱり荒垣さんの様子を見る限り、そんな線引きをしているようには見えないんですけど……」

「彼との付き合いが長くなると、自然と見えてくるんですよ」

「……もしかして、右京さんにも似たんじゃないですか？右京さんにも少なからず、そういう部分がありますよね？」

「……それは心外ですねえ……」

冠城君の言葉に眉をひそめた時。ふと、赤井さんが口を開いた。

「——羨ましいです。……和哉さんのご両親や、叔父である杉下警部の事が」

「……はい？」

「……最近になつてようやく、和哉さんが俺の事を他の人間よりも信頼してくれていると実感するようになりましたが……それはまだ、彼の家族であるあなた方には及ばない。……その場にいるのが俺だけだったら、こんなにも無防備な姿を見せてはくれる事はなかったと思います」

「……………」

「本当に——羨ましい」

そう言った彼の様子を見て、僕はつい笑ってしまった。その様子——まるで、飼い主に構ってもらえなくて拗ねている、犬のように見えたから。

「……………何がおかしいんですか」

「ああ、すみません……………決して馬鹿にしたわけではありませんよ。……………ところで、彼が本当の意味で信頼している、一握りの人間についてですが——そこに、僕は含まれていないと思います」

「……………何？」

赤井さんが訝しげにこちらを見る。……………疑われているようだ。

「さらに言えば、和哉君が今無防備な姿をさらしているのは僕がいるからではなく——あなたがいるからではないかと」

「……………何を根拠にそんな事を……………」

「根拠は、今から見せますよ」

僕はそう言っ、和哉君の頭に触れようと手を伸ばした。僕の予想が正しければ——

「——っ!？」

——気が付いた時には既に、動きを封じられていた。

……………今の僕は、和哉君に触れようとしていた手を彼の片手に掴まれ、彼のもう片方の手に握られているボールペンの先を、自身の喉に



突き付けられている。……………正直、予想以上だった。

「——なっ!？」

「——右京さんっ!？」

「2人共落ち着きなさい。僕は大丈夫ですから」

慌てた様子を見せる冠城君と幸子さんに声を掛け、押し止める。……それと同時に、顔を上げた和哉君と目が合った。——虚ろな目が、僕を見据える。

「——えっ?……………っ、あ…………!？」

しかし、その直後に目に光が戻った。彼は慌てた様子で僕の手を放し、ボールペンを下げる。

「っ、すみません!すみません、すみませんすみません本当にごめんなさい…………!!」

「君も落ち着きなさい、和哉君。……眠っている君に不用意に触れようとした、僕が悪いんです」

和哉君は顔を青ざめさせて、必死に謝っている。……その様子を見て、故意ではなかった事を察した冠城君と幸子さんや、今まで啞然としていたが我に返った赤井さんが、共に彼を落ち着かせてくれた。

「……………すみません……………本当に、すみません叔父さん……………」

「もう謝らないでください。君がわざとやったわけではない事は、よく分かっていますから」

そう言ってしばらく頭を撫でてやると、ようやく落ち着いたようだ。

「……和哉君は眠っていた時、僅かに体の右側に力を入れていました。……そう、僕が座っている側の方です。しかしそれとは反対に、左側の力は抜けていました。そう——赤井さんが座っている側の方です」  
「っ、」

「さらに。赤井さんが彼の肩にジャケットを掛けてあげても、頭を撫でてでも、彼は全く起きませんでした。しかし僕が触れると……結果は先ほどのように、見事に動きを封じてきました。……それから、もう1つ。……赤井さんは和哉君がどちらに顔を向けて眠っていたか、覚えていますよね？」

「………杉下警部の、方に」

「その通りです。彼は僕の方に顔を向けて眠っていました。よって——首の後ろという、人体の急所をあなたの方に向けて、眠っていたんです。人一倍警戒心の強い、和哉君が。」

「……それはつまり——そういう事なのではありませんか？」

「——」

「……これまで表情を大きく変えなかった赤井さんが、初めて分かりやすく表情を変えた。酷く驚いている。」

「………秀一？どうした？」

「っ、——っ!!」

和哉君に声を掛けられ、その肩が跳ねる。……それから、腕で顔を隠すようにして勢いよくカウンタートーテーブルに伏せた。……僅かに見える耳が真っ赤になっている事から、その感情を大体察する事ができた。

「………おい、本当にどうした……?」

「………今の俺の顔を、見られたくないんです……そっとしておいてください……」

「………はあ？」

困惑した様子の和哉君は、僕達の方へ振り向く。

「……俺が寝ている間に、何があっただんですか？」

「……いろいろあつたんですよ」

「うん。いろいろありました」

「いろいろありましたよー」

「……………はあ……………」

首を傾げる和哉君と、未だに顔を伏せたままにいる赤井さんを見て、微笑ましく思う。

(きつと和哉君にとつて——赤井さんはとつくに、線引きの内側に入っている存在なのでしょう)

本人が自覚しているかどうかは分からないが、和哉君は間違いなく、赤井さんの事を本当の意味で信頼している。……今まで両親以外の人間を線引きの内側に入れる事が無かった、かつての人見知りの子供が。

「……………赤井さん……………いえ、赤井君」

「……………はい、何でしょう？」

次に顔を上げた時には、先ほどまでの無表情に戻っていた。……さすがはFBIのエース。ポーカーフェイスはお手のもの、ですか。

「——君に、和哉君の事を任せてもいいでしょうか？」

「!？」

「和哉君の両親以外で、線引きの内側に迎え入れられた存在は、君が初めてです。——君になら、この子を任せられる」

「——」

「……お願いできますか?」

「——はい。お任せを」

……彼はまるで西洋の騎士のように、片手を胸に当てて、恭しく一礼して見せる。……その表情もまた使命を与えられた騎士の如く希望に満ち、今までに見たどの人間よりも、真剣なものだった。

「……………なんか、まるで娘を嫁にやる瞬間みたいですよね、これ」  
「滅多な事言わないでくださいこいつが本気にしたらどうしてくれるんですか!?!」

「え、あ、ハイ、すみません……!?!」

……冠城君と和哉君の言葉を聞き、前言を撤回したくなったのは……ここだけの話だ。

I F ② 花の里にて おまけ

「そういえば。聞きそびれていましたが……昨日一緒に飲みに行ったという荒垣さんの叔父って、どんな人なんですか?」

会議室にて。俺は秀一、降谷、風見と共に書類仕事を片付けていた。周囲には他にも数名の公安の仲間達がいる。

そんな時。息抜きのためか、降谷が俺にそう聞いてきた。

「……そうか。まだ話してなかったか。……まず、俺の叔父は警視庁に所属していて——」

「えっ!?!」

「ちよ、ちよつと待つてください!……日本警察に、荒垣さんの血縁者が!?!」

「ああ……まあ、叔父は身内については公表していないし、俺もそうだから……他には言い触らすなよ?」

「それはもちろん」

「分かっていますよ。……お前達も、今から聞く話を漏洩しないようにしろ。いいな?」

風見と降谷は神妙な顔付きで頷いた。それから降谷が他の部下達にそう言つて、部下達もそれに対して頷き返す。

「……では、続きを聞かせてください。是非!」

「お、おう。……で、俺の叔父はお袋の弟でな。俺が子供の頃に何度か遊んでもらったり、アメリカに行った後もたまに会つて話をしたりして……それなりに仲は良好だ」

「へえ……」

「ただ、なあ……どうも周りからは腫れ物扱いされてるらしい。確かにあの人はかなりの変人だが……普通の人間よりも数倍は頭が良く

て推理力も抜群。正義感も強くて、紳士的。……決して悪い人ではないんだ」

「……和哉さんの言う通り、変わってはいるが良い人だったぞ。彼は、甥っ子である和哉さんの事をとても可愛がっていた。……昨日も別れ際に、〃これからも甥っ子の事をよろしくお願いします〃と丁寧に頼まれたからな」

「ほう……ちなみに、その方の名前や所属、階級などは？」

「——杉下右京警部。特命係という窓際部署の係長だとか」

——瞬間。ある者はお茶を溢して〃熱い！〃と悲鳴を上げ、ある者は足を縛れさせて転んで重要書類をぶちまけ、またある者はパソコンのキーボードを押し間違えて全ての文章を削除してしまい、叫ぶ。

風見は飲んでいたコーヒートを噴き出し、降谷もコーヒートを喉に詰まらせて盛大に咳き込んだ。その拍子に、オフィスデスクの上に積み上げられていた数々の書類が雪崩を起こして床に散らばる。

——大惨事。

「——あの変人の甥っ子!?はあ!?!」

「似てない似てない全然似てない!!」

「あれのどこに荒垣さん要素が!?!」

「むしろ荒垣さんのどこに変人要素が!?!」

「荒垣さんに変人要素が受け継がれなくて良かった!本っ当に良かった!?!」

「というか本当に血の繋がりがあるのか!? 変人の杉下右京と、頼れる男前上司である我らが荒垣和哉との間に!!」

「……………俺は叔父上の人望の無さに嘆いたらいいのか? それとも自分の人望の厚さに喜べばいいのか?」

「とりあえず全員ぶん殴って正気に戻せばいいと思います。いや、俺がぶん殴りましょう」

「待て待て待て秀一 Stay!!」

その後。俺への質問責めやら、大惨事の片付けやらで、全く仕事にならなかつたのは——言うまでもない。